かゑらじと　かねて思へハ　梓弓
なき数に入る　名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信　第 94 号
令和 1 年 8 月 6 日
発行＝四條畷楠正行の会
〒575-0021　四條畷市南野 5 丁目 2 番 16 号
四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

吉野ユネスコ協会一行を大阪・四條畷に迎えて

建水分神社、観心寺そして小楠公墓・四條畷神社

―　「お世話になりました」と嬉しいお電話を頂く　―

●　マイクロバス一杯の 23 人参加　●

7 月 13 日（土）、吉野ユネスコ協会（北岡篤会長・吉野町長）の一行 23 名を四條畷市にお迎えして、正行ゆかりの地をご案内しました。

これは、同協会が管外視察研修事業として実施されたもので、この日、建水分神社（千早赤阪村）で正式参拝・岡山禰宜の講話・扁額鑑賞、そして観心寺(河内長野市)の中院での永島ご住職の講話と昼食・境内散策後、吉野町のバスで四條畷入りされたもので、体育館サンアリーナから同バスに扇谷が乗り込み、市内ガイドをしながら小楠公墓所に到着しました。

先行していた正行の会メンバーの誘導で、同バスを墓所前に駐車させ、一行は小楠公墓所に。

一人一人が小楠公墓所に墓参された後、境内南側の垣根縁石に腰を下ろして頂き、扇谷から小楠公墓所の説明をしました。

●　巨石碑の基礎に込められた民の思い　●

四條畷の合戦後、室町政権・当時の世を憚り、「南無権現」と書いた小碑だけが祀られたいきさつ、そして、約 80 年後に 2 本の若い楠木が植えられたこと、そのクスノキが相和して一本となり、その小碑を包み込んでしまったこと、そして文化 6 年「正四位下検非違使兼河内の守楠公碑」が建設され、一石の四面に 2000 字を超える文字が刻まれ、正行は生前に正四位下の官位を受けていたことが分かることなど、説明しました。

その後、墓所の北側に回り、明治 8 年から 11 年、約 3 年をかけて総高さ 7 ﾒｰﾄﾙ 50 ｾﾝﾁの巨石碑が建てられ、大久保利通の揮毫による「増従三位楠正行朝臣之墓」が刻まれていることなどを説明。そして、この巨石碑が、阪神淡路大震災などの大きな地震でもびくともしなかった理由が、その基礎（250 本の生グイ・大石 650 個・砂礫 500 駄・石灰 200 俵で混ぜ固めている）にあることを説明し、地元の民が正行に寄せる熱い思いの大きさが、この巨石碑の下に隠れていることを紹介しました。

この日、小楠公偲ぶ会の坂本会長はじめ会員の皆さんも駆けつけて下さり、お茶を振る舞って頂き、その上、吉野からの御一行に加え、私たちの会のメンバーにもお土産を準備していただきました。ありがとうございました。

●　女性の手によって創建された御妣神社　●

小楠公墓所を後に、四條畷神社に向かうバスに乗り込む間を利用して、坂本さんのハーモニカ演奏で「櫻井訣別」と『四條畷』を演奏していただきましたので、扇谷も思わず大きな声で歌ってしまいました。

四條畷神社につき、早速、米村宮司が待ち受けて下さる本殿で、正式参拝をして頂きました。

正式参拝後、四條畷神社創建の歴史、そして境内に鎮座する二つの石像、『楠公父子像』と「楠公母子像」について説明。

また、摂社として、良妻賢母の鑑、子育ての大神として正行の母・久子の方が祀られている御妣神社にご案内。
全国に10万社ともいわれる神社の中で、唯一、女性の手によって創建された神社であることや、「妣」（おや）の意が、母が亡くなった後の尊号であることなどを説明。

● 石柱に刻まれた「有孚顒若」 ●

その後、境内の休憩所に移り、参加者の方から質問を受けていた階段を上りきったところの左右に立つ石柱に刻された4つの文字、「有孚」「顒若」の意味について説明しました。
有孚顒若は、東洋最古の書と云われる「易経」の一節で、「孚＝誠ありて、顒若（ぎょうじゃく）たるべし」と読み、その意は、「神前に参る時の澄んだ心は誠があって、非常に厳かである。王は至誠の心と厳粛な態度で臨めば、民は自然と王を尊敬し、仰ぎ観る」とのことです。この4字については、かつて、安井さんにその意味を教えていただいたもので、この日、お尋ねがあるのではと、にわか勉強で準備をし、説明をさせていただきました。

続いて、四條畷の合戦について、合戦要図を国府さんに掲示していただきながら、説明しました。
冒頭、太平記が四條畷の合戦、楠正行3000騎、高師直6万となっており、大方の認識はこうなっているが、扇谷は、正行千騎、師直4万説であることを説明。楠木正成は江戸時代約5万石の大名と同じ石高から見て、勢力は3000から3500といったところ。櫻井の駅では、正成が700騎で湊川に出陣し、正行に2200をつけて河内東条に帰したこと。同様に、四條畷の合戦では、正行・正時討死後、弟の正儀は高師泰と戦い続け、撃退していることから、出陣した兵以上の部隊を正儀に預けて千早東条に残したことは間違いのないところ。故に、正行、千騎説をとっていることを説明しました。

● 師直の偽首を丁重に扱った正行 ●

さて、正平2年12月27日、吉野山を訪れ、後醍醐天皇陵に参った後、後村上天皇にお別れの挨拶をし、如意輪寺本堂の板塀に辞世の歌を刻して、あくる正平3年1月5日、早朝河内往生院の本陣を出陣した正行1千騎は、巳の刻、野崎での衝突を皮切りに、十念寺のある北条辺り、そして南野と激戦を繰り広げ、中野に本陣を構える高師直半町（約50メートル）前に迫ります。
討ち取ったと思った師直が上山の偽首とわかるも、この敵将を讃え、自ら小袖を引きちぎって、その布でこの首級をつつみ、ねんごろに扱った、博愛主義者・正行の美談を紹介。
その御退却するも、待ち構えた師直の配した弓部隊にやられ、古戦田字地残る雁屋の地で刀折れ、矢尽きた正行は、「もはやこれまで」と、死地を探し求め、ハラキリ字地残る権現川堤の適地で、弟・正時と相刺し違えて亡くなりました。

● 歯神さん ●

そして最後の正行ゆかりの地、和田賢秀墓に向かいました。和田賢秀墓では、四條畷の戦いで正行・正時と行動を共にしなかった和田賢秀（正行の従兄弟）は、薙刀を杖代わりに、敵本陣に潜り込み秘かに師直の首を狙うも、敵に寝返った湯浅太郎左衛門に見破られ、この湯浅を、目をカーッと見開き睨みつけたまま、敵に噛み付いて亡くなった逸話から、「歯が強い」歯神さんとして崇められ、今も、近隣から参る人が絶えないことを紹介。
そして、和田賢秀の墓が、市内北東の山中、かつて小松寺の在ったところにもあることを紹介しながら、四條畷に多く残る「両墓制」について説明。多くの墓所は、「埋める場所」と「お参りする場所」が同じ単墓制と云われるのに対し、全国約70カ所にあり、「埋める場所を埋め墓」といい人里遠く離れた地に葬り、一定の期間が過ぎた後は「参る場所を詣り墓」といって、人里に近い場所に設ける両墓制の故か、この和田賢秀墓と小松寺跡地（現在の四條畷ゴルフクラブの中）の二つの墓が残ることを説明。

● ようこそ四條畷へ ●

和田賢秀墓を最後に、吉野からの御一行は、順次、バスに乗車。
正行の会のメンバーがお見送りする中、扇谷が、バスに乗り込み、この日、責任者としてこられた上北山村の中岡さんや北岡吉野町長をはじめ、皆さんにお別れの挨拶をしました。この日、早速お礼の電話も複数いただきました。

【写真】　表面：小楠公墓所大楠の前で　裏面上：四條畷神社境内休憩所で四條畷の合戦について説明　同下：和田賢秀墓で

（文責『四條畷楠正行の会』代表　扇谷昭）